

1. 讃岐の中世城館

- ・中世城館：古くは南北朝時代頃より戦国時代まで日本各地に作られた山城や居館の総称
- ・香川県内には約 400 の中世城館があったことが分布調査により明らかになった。
- ・特に 16 世紀初めの永正の錯乱と呼ばれる幕府中枢人物の暗殺事件を讃岐武士が首謀していたため、以後讃岐国は戦国時代に突入する。
- ・県内に残る中世城館跡はほとんどがこの時期のものである。また長宗我部元親による制圧後、元親は自国としての防衛のため、主要な山城を改修した。
- ・一方、平野部では条里地割を利用した方形居館が発掘等により見つかり、それらは乱世の中、土塁や堀により防御性能を高めていったことがわかった。

2. 中世城館の特徴

- ・縄張り図：防御や時には攻撃のための配置を組み合わせることを縄張りと言う。またその図を縄張り図と言う。
- ・上記の配置の内、主要なものに曲輪（くるわ、小平坦地）、虎口（こぐち、出入り口）、櫓（やぐら）、堀切（ほりきり）等がある。

てんのうじょうあと

たちばなじょうあと

3. 天王城跡（橋城跡）

所在地：三豊市財田町財田上

築城時期：不明

城主：大平国秀

大平氏 鎌倉末期に高知に移住した土佐大平氏の分流で、讃岐守護も務めた。

国秀の 13 代前に讃岐に移住し、香川氏の配下で財田から豊浜に勢力を築いた。

国秀の時期には、豊浜に長兄国祐、麻に次兄国久がいた。

居館 財田上山田井（財田支所南西付近）の近藤政太郎氏宅が「土居の門」と呼ばれており、居館跡ではないかと伝えられる（『新修 財田町誌』香川県三豊郡財田町 1992 より）。

立地：丘陵先端、標高 116m、比高 56m

調査：平成元年財田町教育委員会（『香川県埋蔵文化財調査年報 平成元年度』香川県教育委員会 1990）
平成 25 年三豊市教育委員会（『三豊市埋蔵文化財発掘調査報告書第 7 集 平成 25 年度国庫補助事業報告書 橋城 紫雲出山遺跡 山本町大野地区 弥谷寺遍路道』三豊市教育委員会 2014）

特徴：中心に大きな主郭と、東に大きな曲輪。

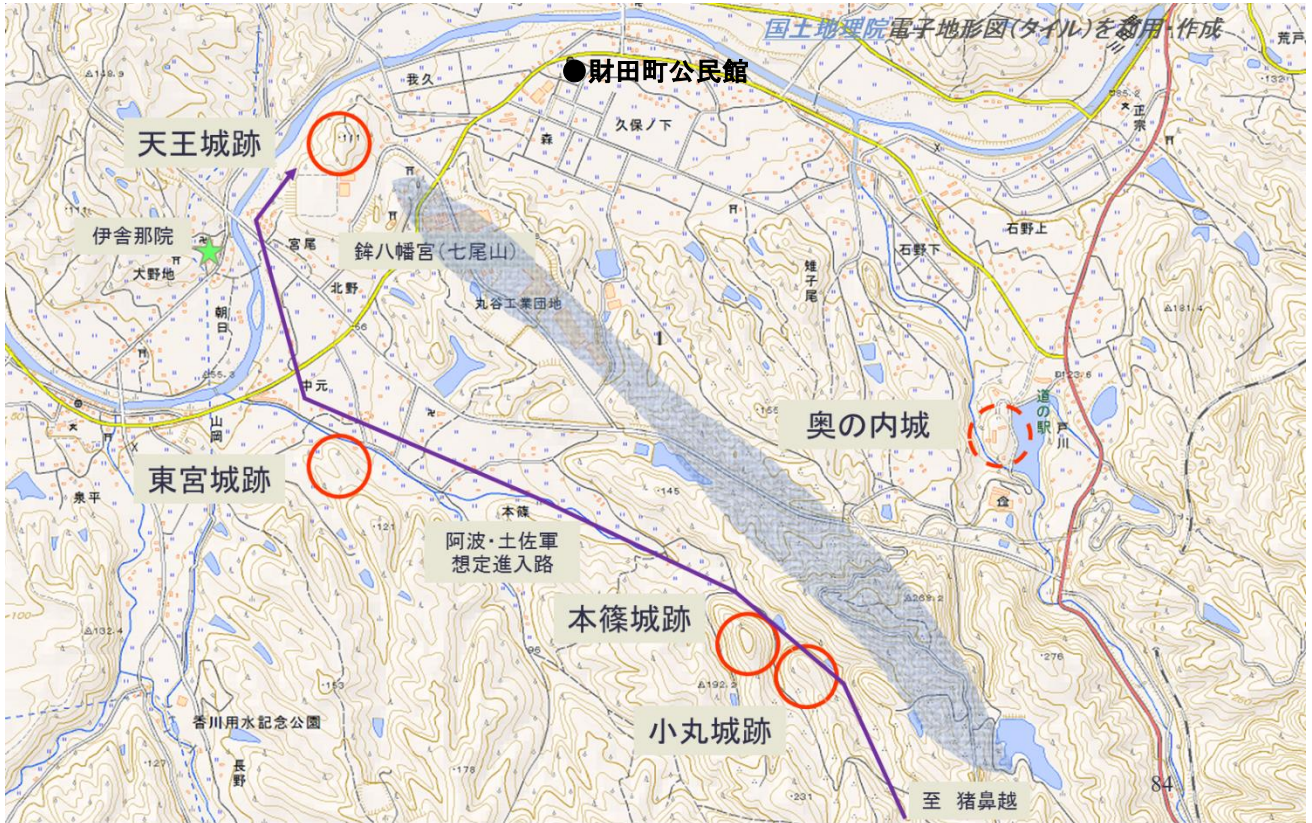
堀切と豎堀の組合せが発達し、強固な防御力を誇る。

→讃岐武士が独自で築き上げる城のレベルでない。長宗我部氏の改修か。

西に防御性が高く、こちらからの攻撃を想定か？

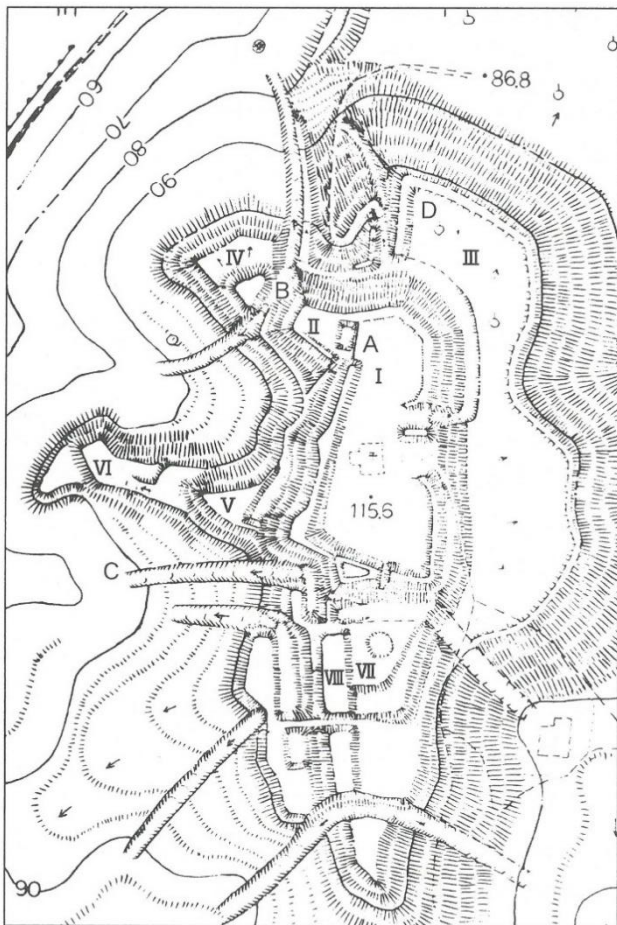
天正 6 年(1578) 長宗我部元親の最初の讃岐侵攻の際、本篠城と共に落城か？

土器や建物跡から、人が常住していた可能性もある。



天王城跡の位置 (約 1/27,000) 国土地理院地形図 1/25000 を約 92 パーセント縮小し、一部分を加工して利用

網点は尾根を表す



天王城跡縄張り図 (1/2,000 図: 池田誠氏)



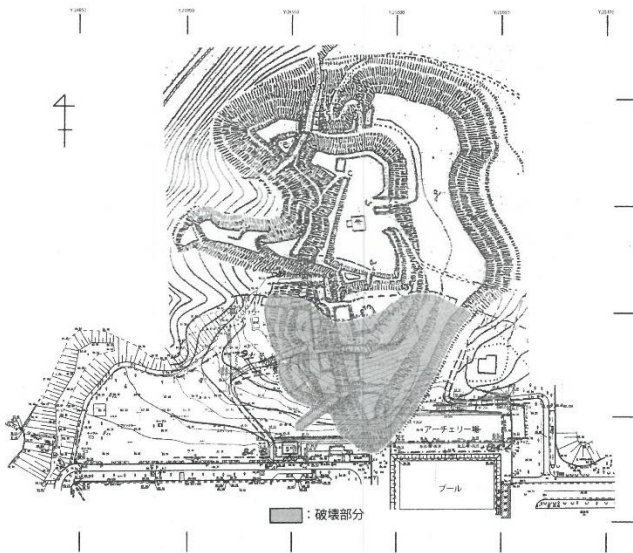
発掘調査の様子



土塁の基礎から出土した土器

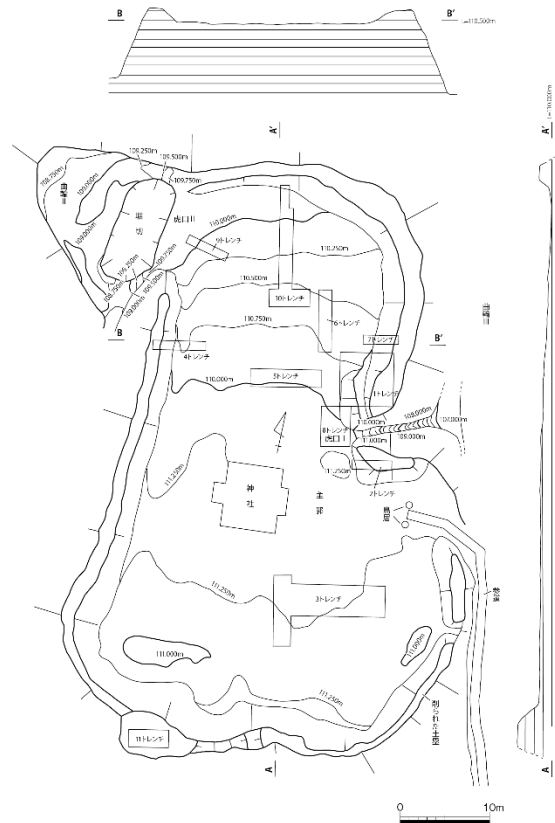
『香川県中世城館跡詳細分布調査報告』2003 香川県教育委員会 より転載

写真: 三豊市教育委員会提供



天王城跡残存状況および周辺測量図

『三豊市埋蔵文化財発掘調査報告書第7集 平成25年度国庫補助事業報告書 橘城 紫雲出山遺跡 山本町大野地区 弥谷寺遍路道』三豊市教育委員会（2014）より転載
 左図約66パーセント縮小 右図50パーセント縮小



天王城跡測量図およびトレンチ配置図(約1/800)

4. 鉾八幡神社

ほこはちまん

1587（天正6）年天皇城主大平伊賀守国秀建立と伝えられる
 財田三郷（財田上、財田中、財田西）の御神体の鉾を祀る

5. 伊舎那院

いしゃないん

1587（天正6）年に長宗我部元親に焼かれ、慶長年間（1596～1615年）に再建されたと伝えられる

大平氏の供養塔と言われている石造宝塔(元町指定有形文化財、鎌倉時代後期の作風)が安置
 安産・子授の寺 さぬき三十三観音霊場
 江戸時代には丸亀藩の雨ごいの寺として栄える。